

海外留学を通じて感じたダイバーシティ

Diversity felt through study abroad

藤川 拓朗 (ふじかわ たくろう)

福岡大学工学部 助教

1. はじめに

近年、長時間労働から効率重視へと働き方が変わり、我々は急速な IT 社会に対応した新しい発想が求められるようになった。このような社会の趨勢にあって、最近頻繁に、“働き方改革”というフレーズを耳にするようになった。実際、このフレーズが取り沙汰されるようになったとき、私は妻と 3 人の息子（当時：12 歳、9 歳、4 歳）を連れて、カナダ・ウエスタン大学（写真-1）へ 2017 年 8 月末より 1 年間の留学の真ただ中であつた。帰国後、何かの縁あって本寄稿を執筆する機会を頂いたため、ここでは、海外留学を通じ“日本とカナダの社会を比較して客観的に感じたこと”や“ダイバーシティ”について私が思うことを自由気ままに書き綴りたいと思う。

2. 日本とカナダの社会の違い

最初に、まず視線が行く“服装”から述べるとすれば、私が 1 年間過ごしたロンドン市（オンタリオ州）は、国籍や老若男女を問わず、基本的に皆ラフなスタイルが多いのが印象的であつた（断わっておくが、スーツ姿のサラリーマンやお洒落に着飾った人たちもたくさんいる）。日本ではつい二度見してしまうような身なりを街中や学内でよく目にしたが、誤解を恐れずに言うと、それも“個性”であり、“ダイバーシティ”ではないだろうか。彼らにとっては、“自身の身なり”に対する他人の評価よりも、自分がこの格好をしたいからという“自分の意思”を優先しているのだと思う。あるいは、身なりは大事である

が、それ以上に機能性を重視しているのかもしれない。このような光景を目の当たりにし、これまで、いかに自分が周りの目という“他人の評価”を気にしすぎていたのだらうと少し情けなく思えた。ある日、ジャケットを羽織って少しお洒落に着飾って大学に登校すると、「どうした？ 今日とは何か大事な会議でもあるのか？」と皆から突っ込まれたのは言うまでもない。これを機に、よほどの用事が無い限りフォーマルなスタイルで登校することは避けようと思った…。私が留学中にお世話になった Tim Newson 先生（写真-2）も普段はラフなスタイルであるが、ある日、出張先のマケドニアで主要なメンバーと面会することになっていた。自前のスーツをスーツケースに入れていたが、運悪く空港でロストバゲッジに遭い、仕方なく私服で面会したそうだが、さすがにその時は大変気まずかったそうである。

折角なので、カナダの小学校のことについてもここで少し紹介したい。私の長男と次男は、英語が全くできなかったが、日本語学校が土曜日の午前中しかないため、平日は現地の小学校に通わせた。現地の小学校でまず驚いたことは、“教科書”と“座席”が無いことであつた。教科書の代わりに毎回授業に関連したプリントが配られ、座席は基本的に自由で、カーペットに座ったりランダムに配置された机と椅子に腰かけて授業を受けたりという感じである（写真-3）。そして、基本的に学校には何を持ってきても良いというのだから驚きである。服装もヘアスタイルも自由。携帯電話、ゲーム機器、おもちゃ、何でも小学校に持ってきて良い。授業中にそれらをしなけ



写真-1 ウエスタン大学工学部前の風景



写真-2 お世話になった Tim Newson 先生との 2 ショット

れば全てが認められている。他にも1日に2回のスナックタイムが設けてあり、子供たちは自宅からお菓子や果物を持参しなければならない。授業は1コマ30分と短い、その代わり9時限までの授業が組まれている。小学生の集中力の持続時間を考えると、30分という授業スタイルは良いように思える。ある日、小学校の全校集会に参加する機会があった。チャイムが鳴り子供たちが元気よく一斉に教室から体育館に集まってきたとき、目を疑うような光景を目の当たりにした。生徒を引率する先生達が皆片手にコーヒークップやタンブラーを持ち、それらを飲みながら、「はい、並びなさい。」と言わんばかりに整列させる姿があるではないか。日本ではまず考えにくい光景であり、そのようなことをすれば間違いなく、“あの先生は・・・”と非難されるだろう。

何事にも型に当てはめず、子供の気持ちや考えを尊重する教育や自由な校風がここにはあり、これこそ本当の意味でゆとりを持たせた教育ではないかと考えさせられた。一概にどちらが良いとは言えないけれども、日本のような規律を重んじる統率された教育の中からは、個性や自由な発想を植え付けることはなかなか難しいのではないかと感じた。

先に述べたように小学校は教科書の代わりにプリントが配られるため一見アナログに見えるが、実は、日本よりもICTを活用している。簡単なプログラミングの実習や、あるテーマについて調べ、それをパワーポイントにまとめて発表させるようなことも低学年から行われている。さらに、授業の様子は家族にネット配信され、子供たちが今日何を学び、どんな様子だったかが手に取るように分かる仕組みだ。欠席の連絡をはじめ、昼食のピザのオーダーから用具や見学会の申込みも支払いも全てがオンラインでシステマティック化されていたのには驚かされた。

これから、あるいは将来的に海外留学や海外勤務を希望される方々もおられると思うが、子供を連れていくことに不安を感じる必要は全くない。よく、“子供は大丈夫だから”という話を耳にし、留学前は自身もかなり疑心暗鬼であったが、実際に1年間を終えてみると本当にその通りだと感じた。1年間という短い期間であったが、

子供たちも次第に友達が増え、半年も過ぎると友達同士のコミュニケーションはさほど困らない様子であった。子供の適応力の高さにはあらためて驚かされるばかりである。

話を戻すが、カナダ人からすると、日本の夏休みの宿題や部活も異様な光景に映るようである。「日本には夏休みなのに宿題や部活があるのか？そんなの“休み”ではないじゃないか！カナダではありえないよ！」と言われたことがあり、これには私も返す言葉が無かった。“働き方改革”だと世間では言っているが、そのためには、海外の取り組みや考え方についても広く学び、改革に伴う“恩恵”と“弊害”の両方を知ることが重要だと私は思う。基本的に、カナダの人々はアフターファイブを楽しみにしているため、よほどのことが無い限り残業をしない。残業は、仕事の能力がない人がするものと言わんばかりである。特に、金曜日の午後になるとみんなが平日以上にソワソワしているのが伝わってくるので面白い。学内の事務やレストランも15時には閉まることもあった。お店の営業時間も他の平日より短めに設定しているお店も多い。ほとんどのカナダ人がそれぞれの季節に応じた楽しみ方を知っていて、時間の使い方が非常にうまいと感じた。日本でも四季に応じた遊びを楽しみ、時間の使い方が上手な人もいるが、自分の周りでもそれは極めて少数であるように思う。

私がお世話になった Tim Newson 先生をはじめ教員の多くは、授業や研究の打ち合わせ、会議の時など必要な時にしかオフィスには来ない。それ以外は自宅をオフィスとして使用しており、時間を効率的に使うことが非常に長けていると感じたと同時に、そこから時間を効率的に使う術を学んだ。

だからといってカナダの社会の全てが良いという訳ではない。もちろん弊害も存在する。実際、自宅前の道路の改修工事はいつまでたっても終わらず、不便な日々が続いたこともあった。おそらくかなりの余裕を見越した工期が取られているのだろう。よほどの緊急性が無い限り、基本的に夜間工事は無い。そのため、労働者からすると工期に追われる心配はないが、利用者からすると不便を感じずにはいられず、一日でも早く整備して欲しい



写真-3 小学校の授業の様子



写真-4 ナイアガラの滝の前で記念撮影

というジレンマに苛まれている。そのような環境だから、2016年11月に起こった博多駅前の陥没事故において、僅か6日間で復旧したことが彼らにとっては信じられないようであった。実際、事故の発生メカニズムと復旧について日本と海外の建設会社の思想の違いを踏まえて話して欲しいと留学先で講義をお願いされたことがあった程である。以下に、私が講義を行った上で役に立った日本と北米の建設会社の違いに関するユニークな文献を紹介したい。英語で恐縮ではあるが、興味のある方は是非とも一読されたい。

- James R. Martin, et. al.: Comparing the Practice of U.S. and Japanese Companies: The implications for management accounting. (URL:<https://maaw.info/ArticleSummaries/ArtSumMartin92.htm>)
- Geoff Haley: Lessons to be learned from the Japanese construction industry, International Journal of Project Management. (1994), 12(3), pp.152-156.

思うに、海外留学や海外赴任を経験し日本に帰宅された方々の中には、海外で学んだスタイルを自身の新しいライフスタイルとして取り込もうと実践した人も多いただろう。でも大変残念なことに、学んだことを日本でいざ実践しようとする、あいつは、“かぶれている”と揶揄されることも少なくないのではなかろうか。あるいは、そういう状況を恐れて自分自身でブレーキをかけてしまうのではないだろうか。かくいう私もその一人である。これには、“ダイバーシティ”を容認する体制がまだ整っていないと感じてならない。周りを気にせずラフなスタイルで通勤し、大手を振って定時に帰宅しようと思ったが、結局のところ、朱に交われば赤くなるとはよく言ったもので、環境への適用という慣れというか、いざ実践することは難しく、あっという間に“日本人”に戻ってしまった自分がいて、これは非常に残念なことである。

3. 帰国してからのワークライフバランスの変化

カナダでは、いつも夕方には帰宅し、家族と一緒に過ごす充実した時間がたくさんあった。休日になると主要な都市や観光地にも家族でよく出掛けた(写真-4)。その一方で、1年間慣れない土地、慣れない環境、異文化で生活する上で次第にストレスが溜まり、夫婦が大ゲンカに発展したこともあった。特に、息子たちが小学校から毎日持って帰ってくる英語で埋め尽くされた配布資料の内容理解、宿題のサポート、帰国後を見越した日本の小学校で習う漢字の書き取りや算数の勉強、三男に至っては4歳とまだ何かと手のかかる年齢であり、とにかく小学校、勉強、家事、育児、掃除、洗濯、買い物、食事と大変であった。この時、家事や子育ては“手伝い”ではなく、“分担と協力”であることを痛感した。最初のうち

は色々大変であったが、いつしか習慣となり、日本に帰国してからも率先して食器を洗い、洗濯物も率先してたたむようになった。慣れれば何てことないものである。いかに妻の負担を減らし家族みんなの時間を創出するかが、夫婦円満な秘訣なのだと思えて学んだ。

私は、大学の職場から自宅まで徒歩10分という恵まれた環境にあるため、普段は、9時に登校、19時に一旦帰宅し、家族みんなで食事を終えて、子供たちと風呂に入り、子供たちがベッドに入る22時ごろまた大学に戻り、深夜1時~2時に帰宅するというスタイルを長年続けている。基本的に帰国後もこのスタイルを崩してはいないが、気分が乗らない時や用事があるときは割り切って早く帰り、その後に再び大学に戻ることも減るようになった。そういう点では、幾分か仕事の効率化を図っていったようになってきたと感じている。

以前、学科の同僚の先生が、恩師の先生から言われた言葉を今でも大切にしているという話を聞いたことがある。それは、“家庭ほど大事な仕事はない!”ということだ。また何かの雑誌で、“家族こそ一番のお得意様である。だから私たちは家族に最大限のサービスを提供しなければならない”と書かれていた記事を目にしたことがある。この度の“働き方改革”により、家族と触れ合う時間が増え、これらのことが当たり前のこととして浸透する日もそう遠くはないのかもしれない。

4. 結びとして

思うままに書き綴ってきたが、結局、この記事は何が“ダイバーシティ”であったのだろうか?少し漠然としているが、でも、この記事を目にされて、海外や留学に対して少しでも親近感を持っていただけたのであれば、垣根を無くすことが出来たという意味では、ダイバーシティの定義に当てはまるのではないだろうか。

先に、カナダ人は季節に応じた楽しみ方を知っていて、時間の使い方がうまいと述べた。これはもしかすると、幼少期の頃から何事においてもあまり制限を受けずに、自身の意思が尊重される環境の中で感受性や多様性が育ったからではないだろうか?そう考えると、これからの日本の社会も単に“働き方改革”だけに焦点に当ててではなく、“幼少時からの教育改革”も見直していく必要があるのかもしれない。また冒頭で述べたように、近年、働き方が見直されてきている。働く時間が減った分、給料が下がったということになってしまえば本末転倒である。仕事の単価を上げたり、限られた労働時間の中で生産性を上げたり、非正規と正社員の格差を是正したりと課題は多い。しかしながら、“働き方改革”のおかげで、一人でも多くの人が豊かに生きていける社会になることを切に願っている。そして、カナダ人に負けないくらいアフターファイブを楽しみ、四季折々に応じた楽しみ方を実践できる世の中にパラダイムシフトしていくことが出来れば幸いである。